

(4) 普及見込み地帯及び面積

県中北部山間地，北部沿岸地帯等，現在の「シモキタ」栽培地域及び「シモキタ」の栽培適地。普及見込面積 1,500～2,000ha。

(5) 栽培上の注意事項

- ア 初期分けつの確保が高収につながるので，本田初期の水管理，肥培管理を徹底すること。
- イ 出穂後下葉枯れが多くなるので，未熟堆肥の多投や稲わらを鋤込みした水田，あるいは強湿田では中干し等の水管理に留意する。
- ウ 多肥では草姿を乱し，受光体制が悪くなり品質低下の原因となるので，施肥量は「シモキタ」並とする。
- エ いもち耐病性は「中」程度であるので，いもち病防除には万全を期する。
- オ 出穂期は「シモキタ」より早いが登熟が遅れるので，できるだけ葉齢の進んだ苗を適期に移植する。特に県北部山間等で遅延型冷害を招くような地帯では中苗以上の苗を移植し，生育が遅れないような栽培を行うこと。

表11 現地調査の概評

場所	評価			優 点	欠 点	どの品種と 変りうるか
	55	56	57			
種 市	*	○	○	千粒重大さい，形質（透明度）良	着色粒多い，光沢劣る，整粒歩合低い，腹白多い，熟期遅い	シモキタ ハヤニシキ
浄法寺	◎	△	○	品質がよい，多収，千粒重大さい，耐冷性強（冷害年多収）	57年低収	シモキタ ハヤニシキ
零 石		○	△-○	被害粒少く品質シモキタ並～やや良，腹白シモキタより少い	腹白やや多い，葉先枯れがある，やや低収，青米，死米やや多い	シモキタ ハヤニシキ
沢 内	◎	○	○	強稈，多収，品質よい，穂数にとれやすい，熟期早い，耐冷性強	登熟やや悪い，葉先枯目立つ腹白やや多い，いもちに弱い	シモキタ
遠 野		○	◎	登熟良，耐冷性強，強稈，品質良	いもちに難点，腹白やや見える，登熟緩慢，穂揃不良	シモキタ
山 田		○	○	強稈，千粒重大さい，品質良	登熟やや悪い，葉先枯目立つ葉いもち，穂数不足で低収	シモキタ

注 *ほとんど収量がなく判定不能

3) 水稻品種コガネヒカリの栽培法

コガネヒカリは，昭和57年に県中部以南地方を対象として，新しく奨励品種に採用され，多収，良質であることと，耐冷性の強いことから急速な普及拡大が見込まれている。農業試験場で現在までの施肥反応，刈取適期等の試験結果から，窒素施肥法，期待生育量等栽培上の指標が得られたの

で、この品種の安定良質多収栽培の参考にする。

(1) 栽培法

ア コガネヒカリに対する窒素施肥法として、基肥量はトヨニシキ並のオール当り0.6～0.8 kg (窒素成分量) が安全な施肥量である。

イ 窒素基肥量オール当り 1.0 kg レベルでは、単位面積当り粒数は確保しやすいが稈長、下位節間の伸長で倒伏し易く過繁茂により受光態勢が悪化し登熟歩合、千粒重が低下するので 1.0 kg (窒素成分量) を超える基肥施用はさける。

ウ 追肥方法は幼穂形成期に窒素成分で 0.2 kg 程度の追肥 1 回施用とする。幼穂形成期、減数分裂期 2 回追肥は穂数、粒数を確保しやすく収量的には向上するが、品質が低下しやすいのでさける。

(表 1, 表 2)

表 1 出穂・成熟期調査 (施肥反応昭57)

試験区 No	品 種 名	基 肥 (kg/a)	* 追 肥 時 期 (出穂前日数) (日)	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	登熟 日数 (日)	成熟時調査			有効茎 歩合(%)	倒伏 程度
							稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂 数 (本/cm ²)		
1	トヨニシキ	0.6	-25	8. 14	10. 1	48	81.6	18.2	508	58.5	0
2			-25, -15	13	9. 28	46	74.4	18.6	504	62.2	0
3	コガネヒカリ		-25	12	26	45	71.4	17.5	500	62.0	0
4			-15	12	26	45	74.4	18.1	484	52.0	0
5	トヨニシキ	0.8	-25	8. 14	10. 5	52	85.0	18.1	542	51.4	0
6			-25, -15	13	2	50	79.5	18.5	582	60.6	0
7	コガネヒカリ		-25	13	2	50	79.6	17.9	591	57.8	0
8			-15	13	3	51	79.1	18.0	548	54.3	0.2
9	トヨニシキ	1.0	-25	8. 15	10. 9	55	90.9	17.9	566	55.5	0.7
10			-25, -15	14	7	54	82.9	18.1	615	57.9	0.2
11	コガネヒカリ		-25	14	4	51	82.7	18.2	588	55.3	0.4
12			-15	13	1	49	87.2	18.0	637	57.0	0.9

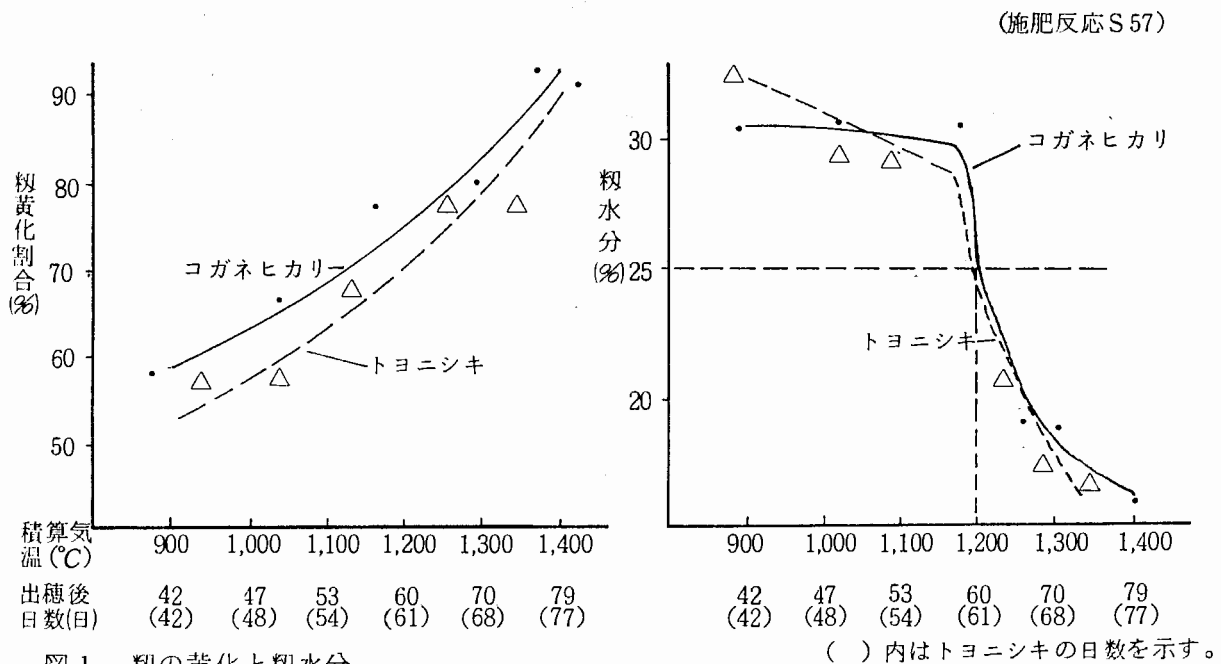
(注) *追肥量は各オール当り 0.2 kg (窒素成分量) とする。

表2 収量調査 (施肥反応昭57)

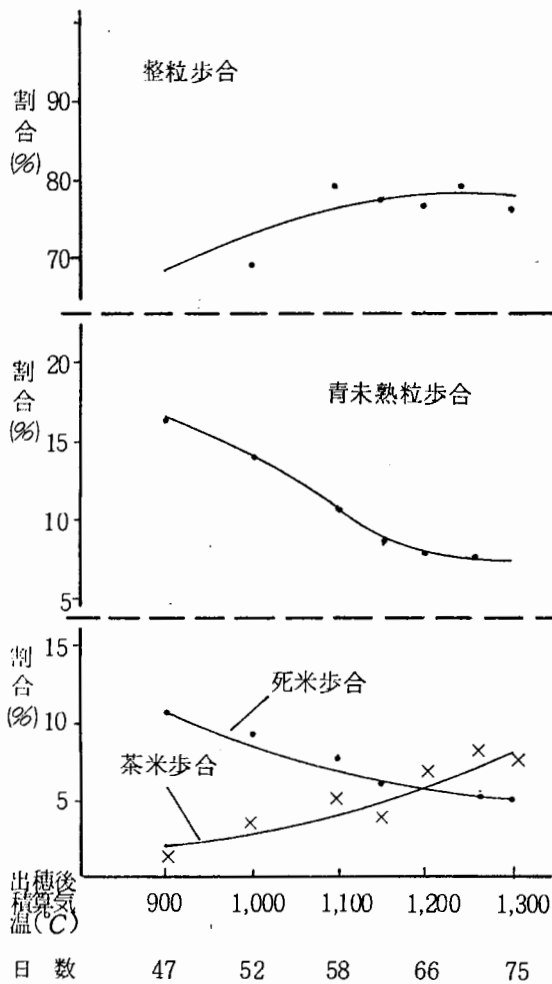
試験区 No.	品種名	基肥 (kg/a)	追肥時期 (出穂前日数) (日)	全重 (kg/a)	わら重 (kg/a)	精粳重 (kg/a)	粳/わら	粳摺歩合(%)	精米玄重 (kg/a)	標準比 (%)	屑米歩合(%)
1	トヨニシキ	0.6	-25	142.2	64.0	75.6	1.19	77.8	58.6	100	6.9
2	コガネヒカリ		-25, -15	149.8	68.4	76.0	1.11	81.6	62.0	106	0.6
3			-25	138.7	66.2	69.1	1.04	82.8	57.2	98	1.0
4			-15	142.2	66.7	73.0	1.09	82.6	60.3	103	1.4
5	トヨニシキ	0.8	-25	149.3	71.6	73.3	1.02	77.4	56.7	97	6.2
6	コガネヒカリ		-25, -15	155.6	72.0	79.7	1.11	81.3	64.8	111	2.9
7			-25	155.1	75.6	77.8	1.03	81.6	63.5	108	2.8
8			-15	164.0	78.7	80.4	1.02	81.2	65.3	111	2.7
9	トヨニシキ	1.0	-25	165.3	82.7	79.4	0.96	76.5	60.5	103	6.7
10	コガネヒカリ		-25, -15	175.6	88.9	83.8	0.94	80.5	67.5	115	3.7
11			-25	170.2	86.7	81.1	0.94	79.9	64.8	111	3.9
12			-15	172.9	86.2	81.1	0.94	79.6	64.6	110	4.3

エ 粳の黄化率80%以上, 粳水分25%以下に到達する速度はトヨニシキより早い。

刈取適期幅は出穂後の積算気温からみて1,000~1,150°C程度で, 1,200°Cを超えると, 着色粒の発生が多くなり品質低下を招き易い。従って刈取適期はトヨニシキよりやや早めの1,050°Cを目途に刈遅れにならないよう注意する。(図1, 図2)



(刈取試験 S56)



(施肥反応 S57)

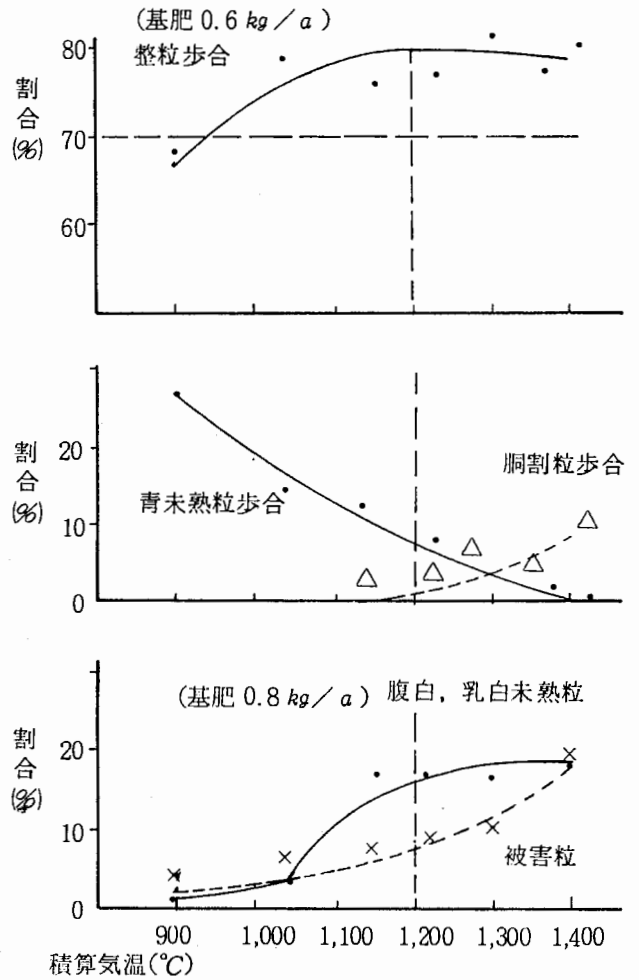


図2 刈取時期と玄米の品質

(5) 施肥法と重点事項

品種名	基肥 N 成分 kg/a		N 追肥時期 (0.2 kg 程度)		水管理	病害	倒伏防止	品質向上対策
	0.6~0.8	1.0	幼穂形成期 (-25日)	減数分裂期 (-15日)				
コガネヒカリ	◎	×	◎	●	◎	◎	◎	◎
トヨニシキ	◎	×	◎	●	◎	◎	◎	◎

凡例：◎最重点，●重点，○効果あり，×回避

(注) 各地域の施肥量については「昭和57年度農業改良技術指導指針，地帯別土壌特性と施肥法」に準ずる。

(6) 期待生育と収量構成要素

玄米収量 650 kg / 10 a 以上を見込む際の期待生育量は次のとおりである。

形質	稈長 (cm)	m ² 当たり穂数 (本)	一穂当たり着粉数 (粒)	m ² 当たり総粉数 (×10 ³ 粒)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)	玄米収量 (kg/10 a)
コガネヒカリ	75~80	530~580	62~68	36~37	80以上	22以上	650以上
トヨニシキ	80~85	480~530	65~75	35~37	80以上	22以上	650以上

栽培上の留意点

- いもち耐病性はササニシキよりまさるが、トヨニシキよりやや劣ることから、いもちおよび紋枯病の防除は基準に従って適期防除に努めること。
- 登熟期の気象不良年次は、乳白、腹白等未熟粒の発生が多くなるので、追肥量は控えめとし、適期刈取につとめること。
- 耐倒伏性の強い品種であることから、これを過信して多肥栽培した場合、品質低下につながるの
で注意する。
- 生育量の不足と稲体窒素濃度低下の著しい場合減数分裂期追肥の併用で出穂後の登熟良化を図る
こと。
- 粒厚の厚い品種であることから未熟粒の混入が高まるおそれがあるので米選機の節目は1.85mm以
上のものを使用するのが望ましい。

4) 消毒種子の催芽温度と苗の生育

昭和57年の育苗期に個人農家の育苗で、出芽遅延や生育不揃いなどの障害が認められ、問題となった。この原因について、種子の予措、病害虫発生面から検討した結果、その原因の1つに、種子の予措、中でも、催芽温度が関係していることが明らかになった。即ち、催芽温度が出芽とその後の生育に大きく影響し、種子の催芽温度が35℃（一定温）を越えるような高温では、発芽勢が低下し、生育も遅延して生育むらを生じる。この現象は、とくに、チウラム剤との混合剤であるチウラム・ベノミル水和剤によって消毒した種子で助長され、消毒によって病害防除が万全となる反面、発芽が全般にやや遅れ気味となる。催芽温度が40℃を越える場合は、さらに出芽遅延や生育むらが著しくなる。

苗立ちを良くし、健苗を育てるためには、まず、適正な催芽温度32～34℃を厳守することが肝要である。

なお、催芽処理を行うに当たって次の点に留意する。

- ① 催芽器又は育苗器などのように、温度設定が正しく出来るものを利用する。
- ② 消毒種子に対して、風呂を利用しての催芽は保健衛生上問題がある。やむを得ず利用する場合は、使用後の清掃を十分に行う。

次に、試験成績の概要を示し、参考に供する。

(1) 催芽温度と生育

表1は、催芽温度と苗の生育状況との関係を、チウラム・ベノミル水和剤（ベンレート・T）による消毒種子と無消毒種子との比較で示したものである。消毒は湿粉衣法または吹付け法により、評価は両法の総合的観察によった。